令和元年度

地域防犯力の向上に関する交流大会

報　告　書

千葉県マスコットキャラクター
「チーバくん」

千葉県環境生活部くらし安全推進課

目　　次

１．プログラム　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

２．出演者紹介　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

３．主催者あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

４．千葉県内の犯罪発生状況等について・・・・・・・・・・・・・・・・４

５．講演（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９

６．講演（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

７．質疑応答・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

１．プログラム

令和元年１０月３０日（水）：千葉市文化センター　アートホール

１　主催者あいさつ　（１４：３０～）

２　千葉県内の犯罪発生状況等について　（１４：３５～）
　　千葉県警察本部生活安全総務課犯罪抑止推進室長　忍（おし）　浩寿（こうじゅ）　氏

３　講演　（１４：４０～）
（１）「犯罪不安・体感治安と地域防犯活動」
　講師：淑徳大学　コミュニティ政策学部　教授　山本（やまもと）　功（いさお）　氏

（２）「自主防犯活動に対する意欲の向上」
　講師：株式会社　生活環境工房あくと　代表取締役　若林（わかばやし）　直子（なおこ）　氏

４　質疑応答等（１６：００～）

５　閉会　（１６：０５）

２．出演者の紹介

講　演

①「犯罪不安・体感治安と地域防犯活動」

講　師：淑徳大学　コミュニティ政策学部

教授　山本（やまもと）　功（いさお）　氏

②「自主防犯活動に対する意欲の向上」

講　師：株式会社　生活環境工房あくと

代表取締役　若林（わかばやし）　直子（なおこ）　氏

淑徳大学　コミュニティ政策学部　教授　山本　功　氏

・ 中央大学大学院文学研究科社会学専攻単位取得退学、現在は淑徳大学コミュニティ政策学部教授として、犯罪社会学、社会問題の社会学を研究。
講演実績として「犯罪をみる３つの人間観－性善、性悪、白紙－」、「コミュニティと安全安心まちづくり」等
日本犯罪社会学会常任理事、警察政策学会会員

株式会社生活環境工房あくと　代表取締役　若林　直子　氏

・ 東京大学大学院工学系研究科博士課程を修了、現在は株式会社生活環境工房あくと代表取締役として、市民の防災、安全・安心や、まちづくりなどの分野において業務を展開。
東京工業大学非常勤講師、早稲田大学客員研究員、一般社団法人子ども安全まちづくりパートナーズ理事

３．主催者あいさつ

千葉県知事　森　田　健　作

はじめに、相次ぐ台風や大雨により亡くなられた方の御冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。

県では、被災された県民の皆様が、一日も早く、元の生活に戻れるよう、引き続き、全庁一丸となって、生活再建や事業再開に向けた支援を行ってまいります。

本日は、御多忙の中、「地域防犯力の向上に関する交流大会」に御参加いただき、誠にありがとうございます。

また、日頃から防犯パトロール活動など、くらしの安全・安心に御尽力いただいておりますことに、深く感謝申し上げます。

本県の犯罪認知件数は、皆様の御尽力もあり、この１６年間、減少傾向にあります。その一方で、依然として窃盗事件や凶悪事件等、県民の皆様が巻き込まれる犯罪は後を絶ちません。

こうした中、県では、地域防犯力の向上に向け、地域防犯の核となるよう、警察官ＯＢ等であるセーフティ・アドバイザーが勤務する「防犯ボックス」の設置促進を図っており、来月、市川市での設置により、県内で１４箇所が運用されることとなります。

引き続き、市町村や警察等と連携し、安全で安心な地域社会の実現に取り組んでまいりますので、皆様におかれましても、より一層の御尽力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本日お集りの皆様のますますの御活躍、御健勝を祈念申し上げまして、あいさつといたします。

（石渡　敏温　有害鳥獣・生活安全担当部長代読）

４．千葉県内の犯罪発生状況等について

千葉県警察本部生活安全総務課犯罪抑止推進室長　忍　浩寿　氏

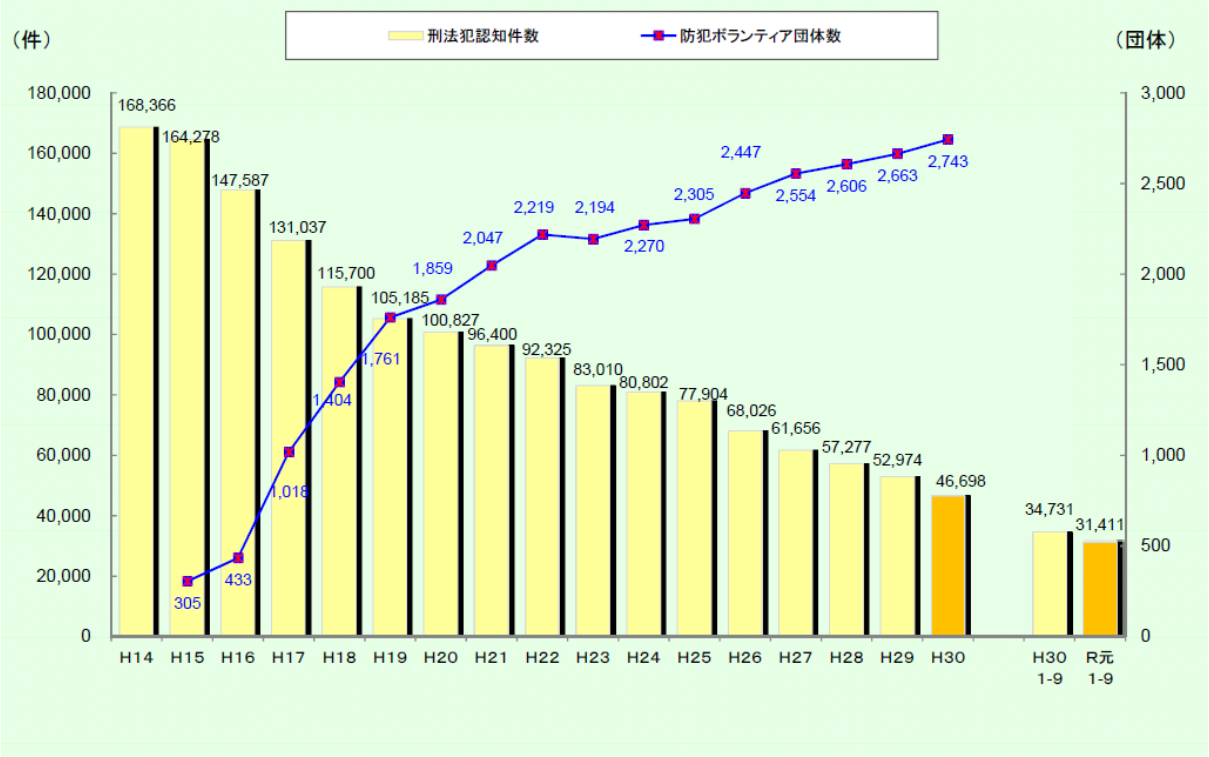
皆さん、こんにちは。千葉県警察本部生活安全総務課犯罪抑止推進室長の忍と申します。本日御来場の皆様には、平素から警察業務全般にわたりまして深い御理解を賜り、この場をお借りしまして感謝申し上げます。

本日は、千葉県内における犯罪情勢と、現在、被害が深刻な電話ｄｅ詐欺の被害状況について話をさせていただきたいと思います。

●県内の治安情勢と防犯ボランティア団体数の推移

まず、治安のバロメーターと言われております「刑法犯認知件数」です。これは、犯罪被害に遭った、警察に届けを出した件数になりますが、この認知件数の推移を御覧ください。千葉県では戦後最多を記録した平成14年の16万8,366件で、その後、平成15年から昨年まで16年連続、減少しております。この表の中で、折れ線で示させていただいているのは、防犯ボランティア団体の推移となりますが、犯罪の減少と防犯ボ

千葉県の刑法犯認知件数及び防犯ボランティア団体数の推移



ランティアの、その結成、活動が反比例のようになりまして、皆様方のそういった尽力が犯罪を減少させているものと認識しております。この防犯ボランティア団体が増加して、やはり、自分の街は自分たちで守るという機運を持っていただき、活動を活発にしていただければ、さらに刑法犯の認知件数が減少するものと考えております。

●「ながら見守り活動」について

防犯ボランティアの方々による日々の活動は、青色防犯パトロールカーや徒歩によるパトロールなど、日々、積極的に行っていただいているところでございますが、子どもが被害に遭う凶悪な事件が各地で相次いでいる中、地域における子どもの見守り活動の活性化が課題となっております。このため、現在、児童の登下校時間におきましては、犬の散歩や買い物の際に防犯の視点を持っていただき、児童を見守るという「ながら見守り活動」に御協力いただくことを推奨しております。皆様御自身の地域でも、朝夕の犬の散歩等の際の通学途中の子どもの見守り活動や、日ごろからの相互の挨拶が絆を深め、犯罪を未然に防止することにつながりますので、ぜひとも御協力の程、よろしくお願いいたします。

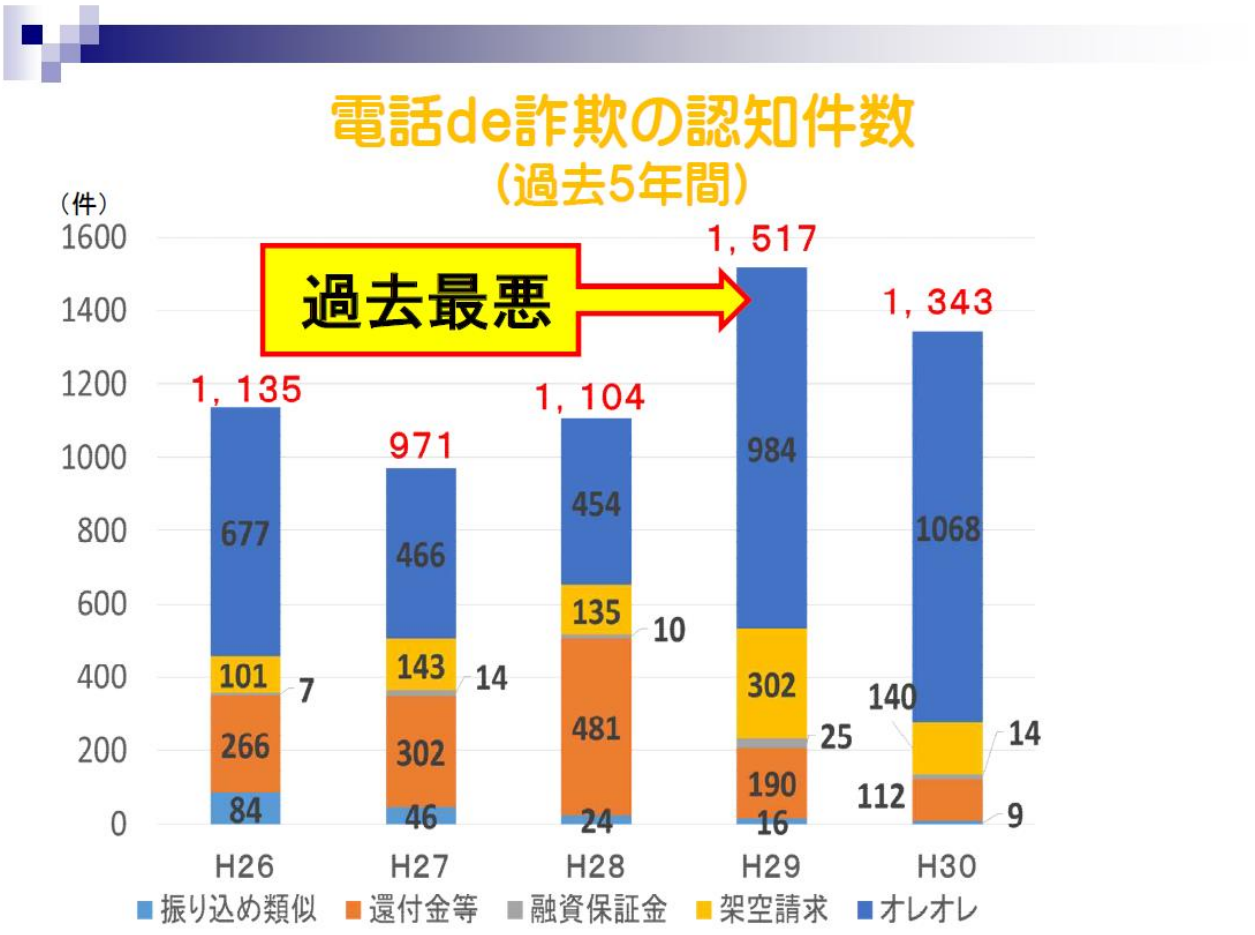
愛犬の散歩を利用した「わんわんパトロール」運動

●電話de詐欺の被害発生状況

次に、減少している刑法犯の中において、非常に被害が深刻である、電話ｄｅ詐欺について説明をさせていただきます。電話ｄｅ詐欺は、全国におきまして、昨年（平成３０年）の認知件数は約1万6,000件で、依然として深刻な状況が続いております。千葉県におきましては一昨年（平成２９年）、1,517件と過去最悪の被害となり、被害額も31億1,000万余りと、大変深刻な状況でありました。また、今年も増加傾向にありまして、９月末現在1,049件、約17億3,000万円の被害が出ております。

●電話de詐欺の手口

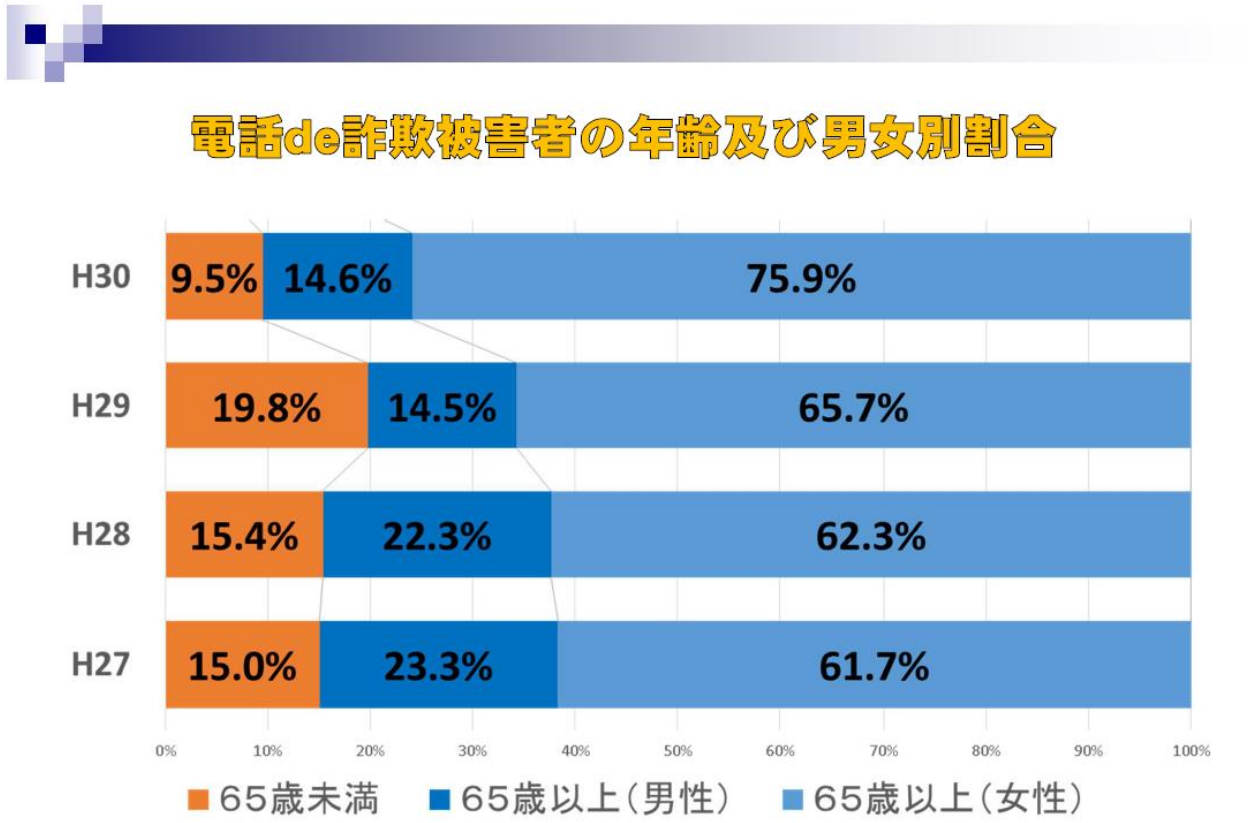
次に、電話ｄｅ詐欺の被害の変遷を御覧ください。オレオレ詐欺が多いことには変わりありませんが、従来の「俺だけど、カバンを取られた」あるいは、「妊娠させてしまった」などと言って、お金を貸してくれないか、という手口のほか、最近では、警察官や銀行員を名乗り、言葉巧みにキャッシュカードをだまし取ったり、カードをすり替えて、犯人がＡＴＭから現金を引き出すという事案が増加しております。また、架空請求はがきを使ったものや、役所や官公庁などの職員を騙り、「還付金があります」と言ってＡＴＭへ誘導し、携帯電話で通話しながら、操作をさせてお金を振り込



ませたり、コンビニエンスストア等でアマゾンギフトカードなどの電子マネーを購入させ、代金をだまし取るなどの被害も出ております。

●電話de詐欺の被害者層

次に、被害者の年齢及び男女の割合について、表を御覧ください。一目瞭然かと思いますが、圧倒的に65歳以上が多く、特に被害者の約８割が女性となっております。



●電話de詐欺は電話de対策

それでは、その電話のやりとりがあった音声をお聴きください。

【音声再生】

犯人　「まずいことになっちゃてね」

被害者「何があったの？」

犯人　「午前中、用事があるって言ってたでしょう」

被害者「うん、木更津に今いるって言ってたでしょ」

犯人　「そうそうそう、で、昔からお世話になっている中村さんって人に会いに来てたの」

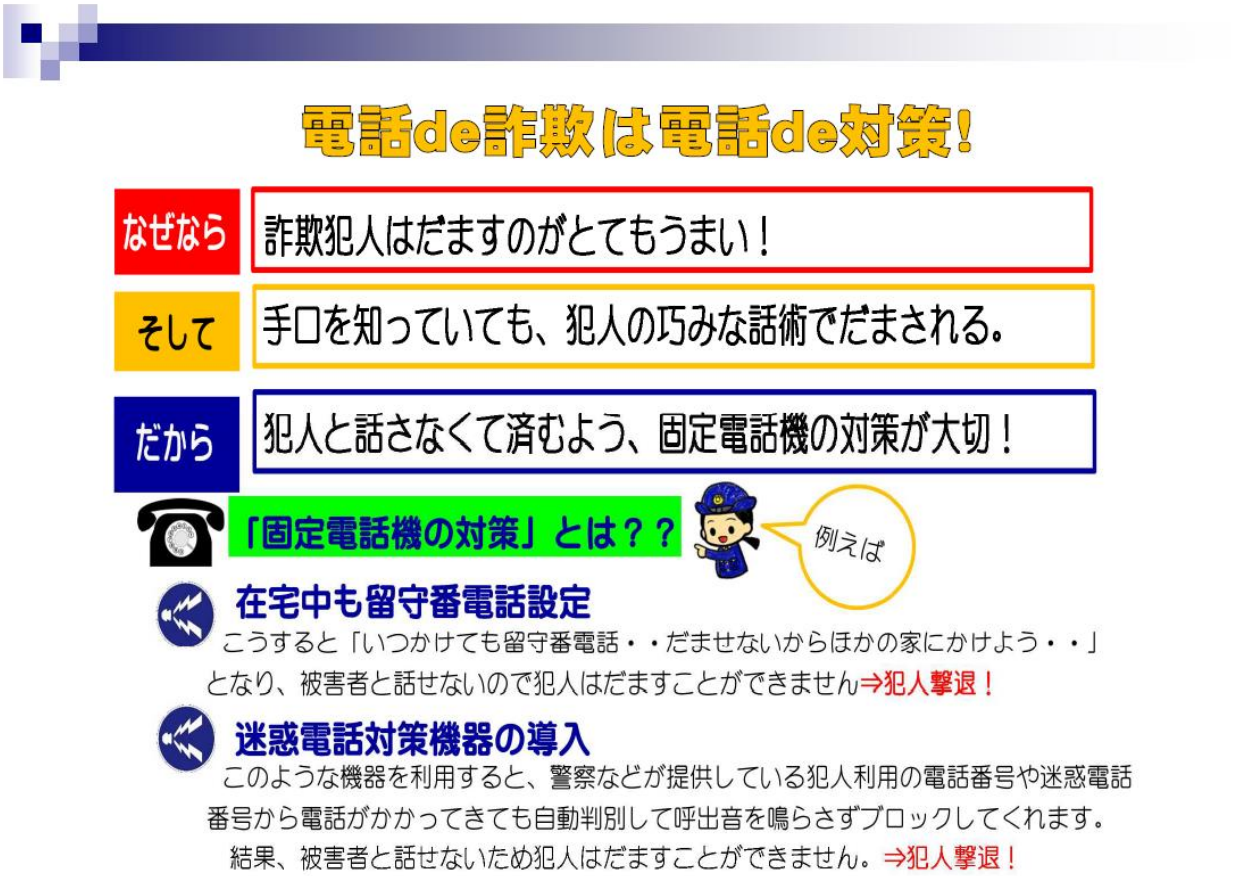
被害者「うん」

犯人　「それで、前々から一緒に株やらないかって誘われてたの」

被害者「え？何を？株？」

【音声停止】

この内容につきましては、館山市内で実際にあったものとなります。相手の言いなりに誘導されているのがわかると思います。やはり、こういった、高齢者の隙を狙う卑劣な犯罪につきましては、それを撲滅するため、「電話ｄｅ詐欺は電話ｄｅ対策」というキャッチフレーズで、留守番電話を利用することを推奨しております。電話で、お金やキャッシュカードと言われたら、これは詐欺となります。「みんなが留守番電話設定をやっていく」、これを合い言葉として、本日お集まりの皆様には、ぜひ、「電話ｄｅ詐欺は電話ｄｅ対策」というフレーズを覚えて持ち帰っていただき、近隣や御家族の方にお伝えいただくよう、御協力の方、よろしくお願いいたします。そして、不審な電話がかかってきたらすぐに最寄りの警察署、または110番通報をお願いいたします。警察といたしましても、県や自治体、関係団体と協力をして、予防、そして、検挙に努めていきたいと考えております。



結びに、本日お集まりの皆様の、ますますの御活躍と健勝をお祈りして、講演を終わらせていただきます。御静聴、ありがとうございました。

５．講　演（１）

テーマ：「犯罪不安・体感治安と地域防犯活動」

講　師：淑徳大学　コミュニティ政策学部

教授　山本　功　氏

ただいま御紹介にあずかりました淑徳大学の山本でございます。今日はどうぞ、よろしくお願い申し上げます。本日は、私が今まで調査研究してきたことを少しばかり、30分ほどで御紹介したいと思っております。タイトルは「犯罪不安・体感治安と地域防犯活動」というものでございます。それでは、よろしくお願いいたします。

●「社会」の見方

さて、まず、私たちが生きるこの社会、日本社会というものがどうなっているのかということを知るためには、いろんな方法が必要です。一つの方法だけでは社会のことはわかりません。極端な、２つの対極的な方法としては、鳥の目と虫の目、あるいは、望遠鏡と顕微鏡と言ってもいいです。社会全体を見渡すような鳥の目、あるいは、望遠鏡の仕方で見る見方だけでもいけませんし、虫の目という、身近なところ、あるいは微妙な、小さなところに焦点を当てた見方、この両方が必要でございます。

さて、一つだけエピソードを紹介したいと思います。時期も場所も申し上げることはできないのですが、ある通り魔事件です。通り魔事件で、複数名の人が街中で殺傷されました。犯人は逃げておりました。そのあと、しばらくたって捕まったのですが、捕まって、取り調べ室で、取り調べをしたことでわかったことです。犯人はこういうふうに言ったそうです。「あと一人やろうと思ってた」、「あと一人襲おうと思っていた」。で、相手を物色して公園にいたんです。その公園には小学生くらいの子どもがいました。「あの子をやろう」と思ったんだそうです。そのとき、ちょうどそのときに、防犯パトロールの人が、その子に、小学生くらいの子どもに声をかけたんだそうです。「危ないよ。通り魔が出たから、まだ捕まってないから、早くおうちに帰りな」と声をかけて、その子は帰ったそうです。それで、その犯人は諦めた。それ以上事件を起こすことなく、逮捕されました。このことは、取り調べ室の中で初めて出てきた話でして、これ、記録に残らないんですよね、こういうことは。記録に残らない

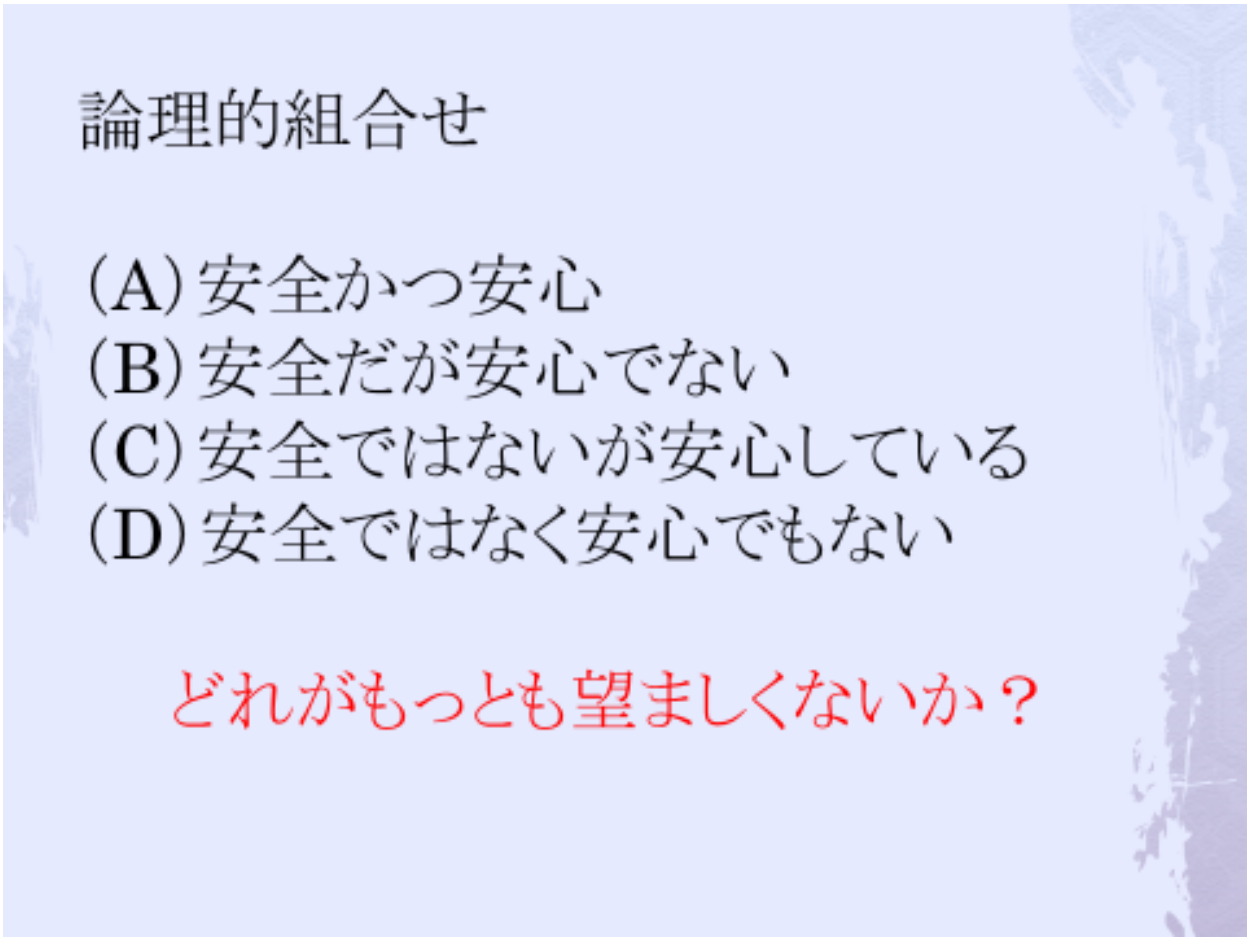
し、功績としてたたえられることもありません。しかし、間違いなく、防犯パトロールの成果であります。防犯活動ってこういう特徴ありますよね。何も起きないことが一番ですから。なので、何が成果なのかよくわからない。頑張って、一生懸命頑張っている人にとっても、一体、どういう役に立ったかがよくわからない。でも、こういうふうに、記録として残らないところで、誰かを助ける、誰かを助けていること、こういうことはたくさんあるんだろうなという気がいたします。こういうのが、言ってみれば、虫の目、顕微鏡的なものの見方だと思います。

他方では、社会の全体状況というものを見渡すには、どうしても鳥の目というものを持たざるを得ません。これは、南米ペルーのナスカの地上絵という絵です。これ、クモなんですけど、クモに見えますかね。この絵は、地上からは、何が何だかわかりません。はるか上空、高いところに上がることによって、飛行機やヘリコプターから見て、初めて見える絵です。近年、ドローンというものが安く使えるようになりました。ペルーでも、ドローン、それから衛星画像を分析する力が、技術が発達しましたので、衛星画像とドローンの組み合わせで調査をしたところ、新たに、この数年間、50以上もの地上絵が発見されたそうです。つまり、一方では、虫の目で、身近な日常をじっくり観察することでしか見えない光景があると同時に、他方では、高いところから、鳥の目からでないと見えない光景というものもあります。今日、私の御紹介は、どちらかというと鳥の目タイプです。データを使って、この社会のあり方を見ていこうというものでございます。さて、犯罪、あるいは非行、ひっくるめていいですが、犯罪や非行状況というものを、先ほど、千葉県警の方が、県内の状況を御紹介いただきましたが、日常的に犯罪統計を目にするということは、普通の人々は、そんなにないですよね。防犯に関心のある方であれば、交番や所轄署が出している防犯便りとか、交番の便りを見ることで、所轄署管内の、あるいは、交番管内の状況というものを見ることはできますが、日本全体の犯罪統計を見ることというのは、そうそう、ないですよね。多くの人にとっては、テレビのニュースや新聞記事を媒体として、世の中の出来事を知る、今の日本はこうだ、ということの感覚を、感触をつかむというのが普通だと思います。ちょっと古い研究を紹介したいのですが、じゃあ、テレビ、あるいは、新聞の記事というものは、一体、どれくらいの犯罪を紹介しているんだろうか、あるいは、記事にしているんだろうか。ちょっと直感的に考えても、全ての犯罪を報道するのは無理ですよね。新聞は紙面が限られているわけですし、全部載っけるのは無理です。あと、テレビのニュースも、時間の尺がありますから、全てを報道すると

いうのはあり得ません。これ、計算した研究がありまして、こうなります。これ、ちょっと古い研究なんですけれども、1988年データです。朝日と読売の平均値を出したものです。殺人事件、この年は1,000件くらい、殺人が認知されていますけれども、そのうち、新聞記事になって出ているのは事件件数の14％です。逆に言えば、85％の殺人事件は報道されていません。そもそも、出ていません。強盗でも6.9％、放火で2.5％、窃盗だと万引きも入りますから、0.008％、ほとんど数値になりません。こういうことを見ますと、社会というものが一体どうなっているのかを知るには、メディアだけだとどうもうまくいかないということがわかるかと思います。

さて、今日は、この３つの点、３つにわたってお話したいと思っています。１つ目は安心と安全のディレンマということです。２つ目に、警察庁という役所が行いました、私もメンバーとして行いました、全国調査を紹介したいと思います。３つ目は、日工組社会安全研究財団という財団が、継続的な体感治安や犯罪不安の調査を行っていますので、これの結果から御紹介したいと思います。

●安全と安心のディレンマ

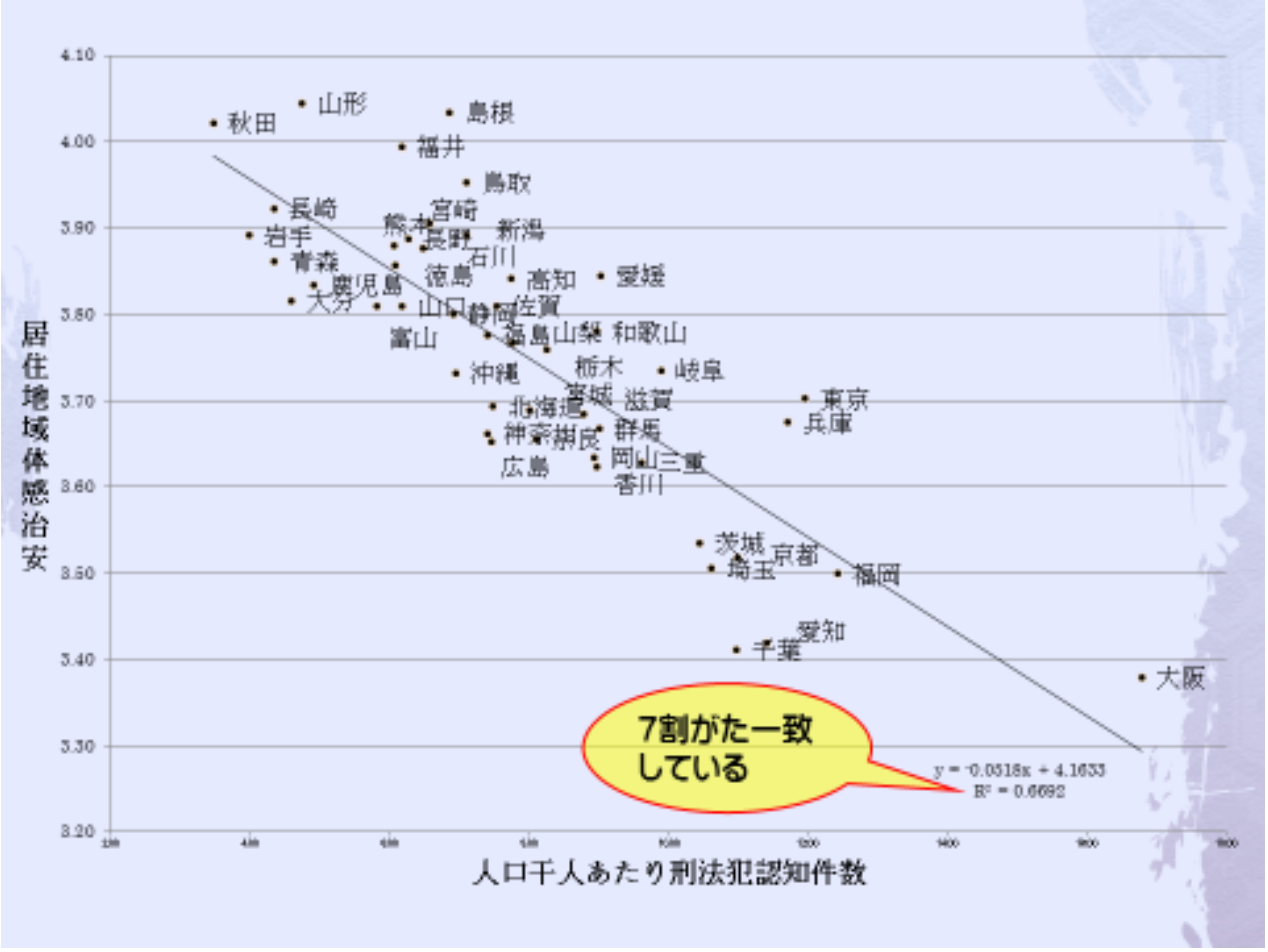


さて、安全・安心を目指すということは、例えば、犯罪対策閣僚会議を初め、さまざまな機関において、政策目標として掲げられているところでございます。でも、安全・安心って、これ、２つの言葉です。言葉を２つ並べるということは、「安全」と「安心」は違うのだということでございます。じゃあ、どう違うかというと、「安全」というのは客観的な状態ですね。例えば、犯罪で言えば、犯罪の認知件数ですとか、暗数調査など、さまざまな調査で特定される、客観的な社会のあり方です。「安心」というのは、主観的なものです。これは、アンケートなんかで測定されるものです。違うものだということを確認できましたが、論理的な組み合わせとして、４パターンつくれます。安全と安心は違う以上、この４パターンが考えられます。安全かつ安心。安全だけれども安心ではない。安全ではないけれども安心している。安全ではなく安心していない。（A）が、安全かつ安心が一番なんですけどね、それはもちろん。これは一番です。では、どれが一番、まずいですかね。一見すると（D）、安全ではなく安心でもない、が、よくないような感じもするんですけども、私は（C）だ

と思うんですよね。安全ではないけれども安心しているという状態。実はそれが一番まずいんじゃないか。だって、安全が安心をもたらすのは、これは望ましいことです。より安全だったのであれば、安心してよいわけです。だけども、安心が安全をもたらすかどうか、というと、ちょっと考えにくい。そういうこともあるかもしれないですけど、ちょっと、私、思いつかないです。安心しているから安全だというのは、ちょっと、それ、変だという気がします。こういう話、読売新聞の、『よみうり寸評』に紹介してもらいまして、こんな記事もあります。これ、読売の記事でございますが、例えば、山形県という県は全国調査でいうと一番、体感治安がいい県なんです。ところが、窃盗事件が多くて、その窃盗事件の被害者の方の86％が、そもそも、おうちに鍵をかけていなかったんです。ちょっと千葉だと考えにくいかもしれませんけれども。つまり、ある種の安心感は、逆に危険を招く、ということが指摘できます。安心の反対語として何を持ってくるか難しいんですけれども、恐れ、恐怖だったり不安だったり、関心だったり。英語に直すとanxietyだったりfearだったりconcernだったり、いろんな水準で考えることができます。これが１つ目のお話でございます。

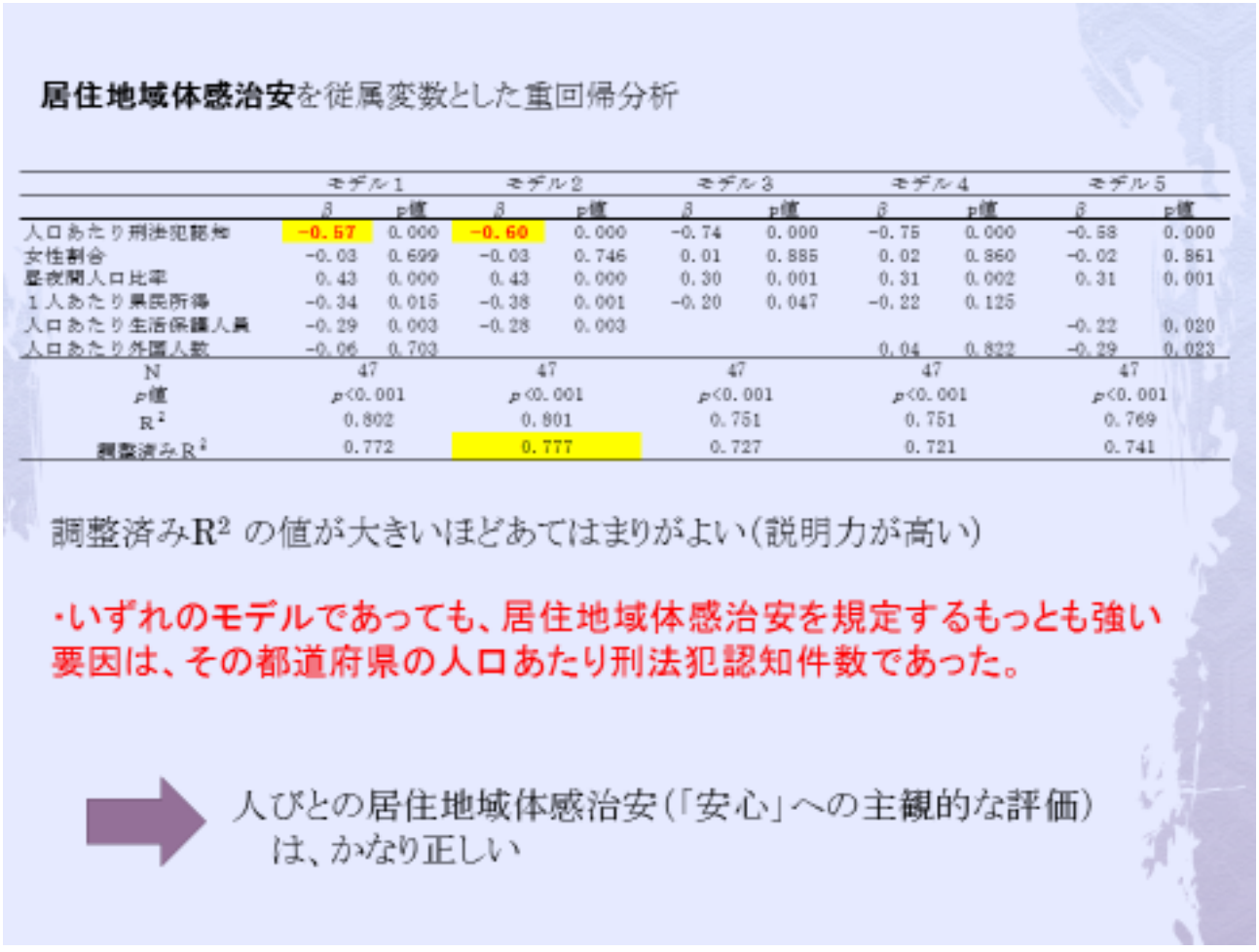
●警察庁全国統一治安意識調査の分析：都道府県の違いを中心に

２つ目として、警察庁の全国治安意識調査というものを紹介したいと思います。今のところ都道府県比較できるデータが、これしかないんです。内閣府の調査や法務省の法務総合研究所の調査とか、いろんな調査研究がなされていますけれども、都道府県間比較できるぐらいのデータが確保されているのは、実は、これ唯一ですね。2015年の調査でございます。アンケート形式です。こういう質問です。「あなたはお住まいの地域の治安をどの程度だとお感じですか、どれか丸を一つつけてください」悪いとかよい、悪いからよいまで５段階です。それから、犯罪不安に関してはこういった犯罪、例えば、住宅への泥棒なんかで、不安に思うかどうかを４段階で測定したものです。この図なんですけれども、これ、何をやっているかというと、横軸、Ｘ軸は人口1,000人当たりの刑法犯認知件数ですから、ある種、客観的な犯罪情勢です。で、縦軸は先ほどのアンケートでとった居住地域体感治安、ですので、主観的な、安心しているかどうかです。上のほうが、これ、安心しています。５点満点で４点ですから。下のほうが安心していない。危機意識を持っている、不安に思っているということです。この分析が、日本で初めての分析でして、客観的な犯罪情勢と、人々の不安感、あるいは体感治安というものが、一致するのか、ずれるのか、ということを検証した、



初めての図でございまして、これが、技術的なことを言いますと、決定件数というんですけれども、これが0.66ですから、７割くらい、一致しています。社会科学のデータで、これほど一致することは珍しいです。つまり、地域の治安情勢に対する、人々の、住民の皮膚感覚というものは、驚くほど正しい。どれぐらい正しいかというと、７割方、正しいということです。なお、この図で言いますと、千葉は、この時点で見ると、刑法犯の発生率、全国的に見ても、悪いほうです。体感治安も悪いほうです。断トツで、一番悪いのは、大阪です。かなり離れていますから、他の都道府県と比べて、かなり離れています。あまりよくないのは、こっち（表の右側）のグループです。千葉、愛知、福岡、京都、茨城、埼玉が並びます。ただし、この直線、これ、回帰直線と言いますが、この回帰直線よりも下にきていますので、千葉県の方々は、千葉県民は、客観的な犯罪情勢に比べると、ちょっと体感治、悪過ぎ。自分たちの県についての評価、低過ぎです。逆に、東京と兵庫は、これ、この直線よりも上にいっていますので、逆に、東京の人と兵庫の人は安心し過ぎということです。秋田とか山形、長崎、岩手、青森は犯罪状況も悪くないし、主観的な不安感も悪くはないというところです。

もちろん、体感治安とか犯罪に対する不安感というものに影響を及ぼすのは、客観的な犯罪情勢だけではなく、例えば、失業率だったり生活保護率であったり、いろんな要因が考えることができます。なので、いろんな要因を、同時に、いろんな要因の影響を除去した上で、どれぐらい関連があるか、つまり、人々の皮膚感覚が正しいかどうかという検証をしました。細かい説明は端折ります。例えば、ガンになる原因として考えられるものは、一つだけではないわけです。たばこ、それからお酒、ストレス、塩分摂取量、運動不足、不規則な生活、年齢、いろんな要因が考えられます。たばこがガンの原因になるという場合には、他の、年齢ですとか食生活ですとか、いろんな影響を除去した上で、たばこのリスクというものを計算するわけです。医学でいう、いわば、回帰分析と一緒の方法です。例えば、同じようなやり方として、これは淑徳大学の授業アンケートの結果で、学生が授業に満足するかどうかに影響するのはどれかというと、話し方がわかりやすいのが一番だということです。そういう分析をしまして、細かい数字が並んでまして、これ、何が言えるかというと、どういうモデルを組んでも、女性の割合ですとか、昼夜間人口比、１人当たりの県民所得、人口当



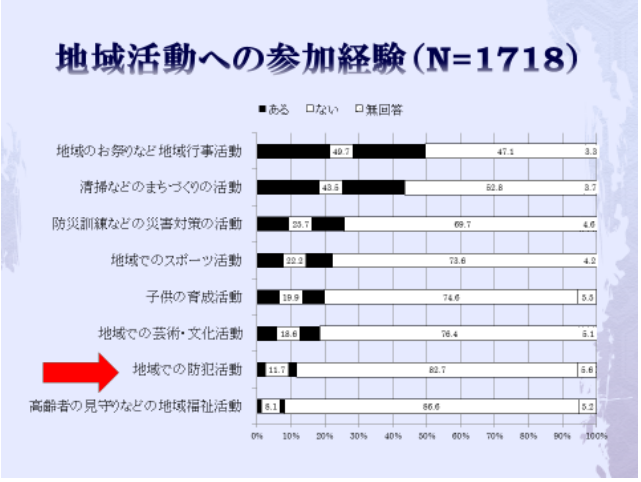
	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4		モデル5	
	β	p値	β	p値	β	p値	β	p値	β	p値
人口あたり刑法犯認知	-0.57	0.000	-0.60	0.000	-0.74	0.000	-0.75	0.000	-0.58	0.000
女性割合	-0.03	0.699	-0.03	0.746	0.01	0.885	0.02	0.860	-0.02	0.861
昼夜間人口比率	0.43	0.000	0.43	0.000	0.30	0.001	0.31	0.002	0.31	0.001
１人あたり県民所得	-0.34	0.015	-0.38	0.001	-0.20	0.047	-0.22	0.125		
人口あたり生活保護人員	-0.29	0.003	-0.28	0.003					-0.22	0.020
人口あたり外国人数	-0.06	0.703					0.04	0.822	-0.29	0.023
N	47		47		47		47		47	
p値	p<0.001		p<0.001		p<0.001		p<0.001		p<0.001	
R^2	0.802		0.801		0.751		0.751		0.769	
調整済みR^2	0.772		0.777		0.727		0.721		0.741	

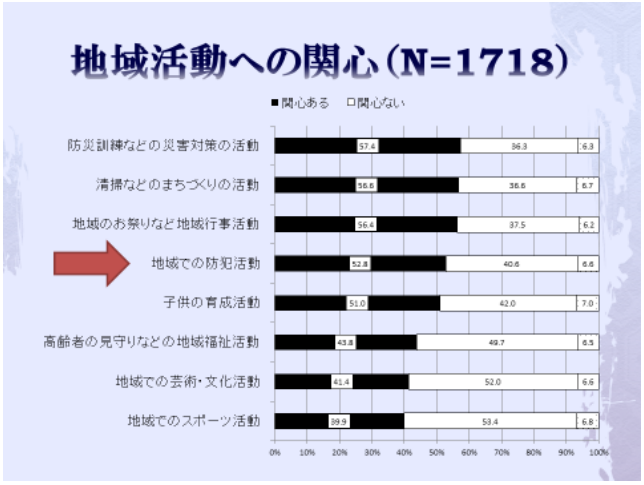
たりの生活保護人員、人口当たりの外国人数といった、こういう要因を組み込んで計算して分析しても、実は、刑法犯認知件数が、つまり、客観的な犯罪情勢が、一番、関連が強いわけです。そうすると、ほかのいろんな反応、客観的な犯罪情勢に対してだけ反応しているんじゃなくて、社会、経済的な、経済情勢やなんかも重要じゃないという反応、あり得るんですけれども、結論から言えば、分析の結果では、「ひとりの市民の、あるいは住民の、居住地域に関する体感治安は驚くほど正しい」です。こういうことが言えます。なので、別に犯罪統計見てなくても、いちいち、統計の数字を見ていなくても、新聞やテレビに別に頼らなくても、その地域に住んでいる人々はその地域のことを肌感覚でよくわかっているということであります。これが２つ目の紹介でございます。

●地域防犯活動への参加経験と関心：

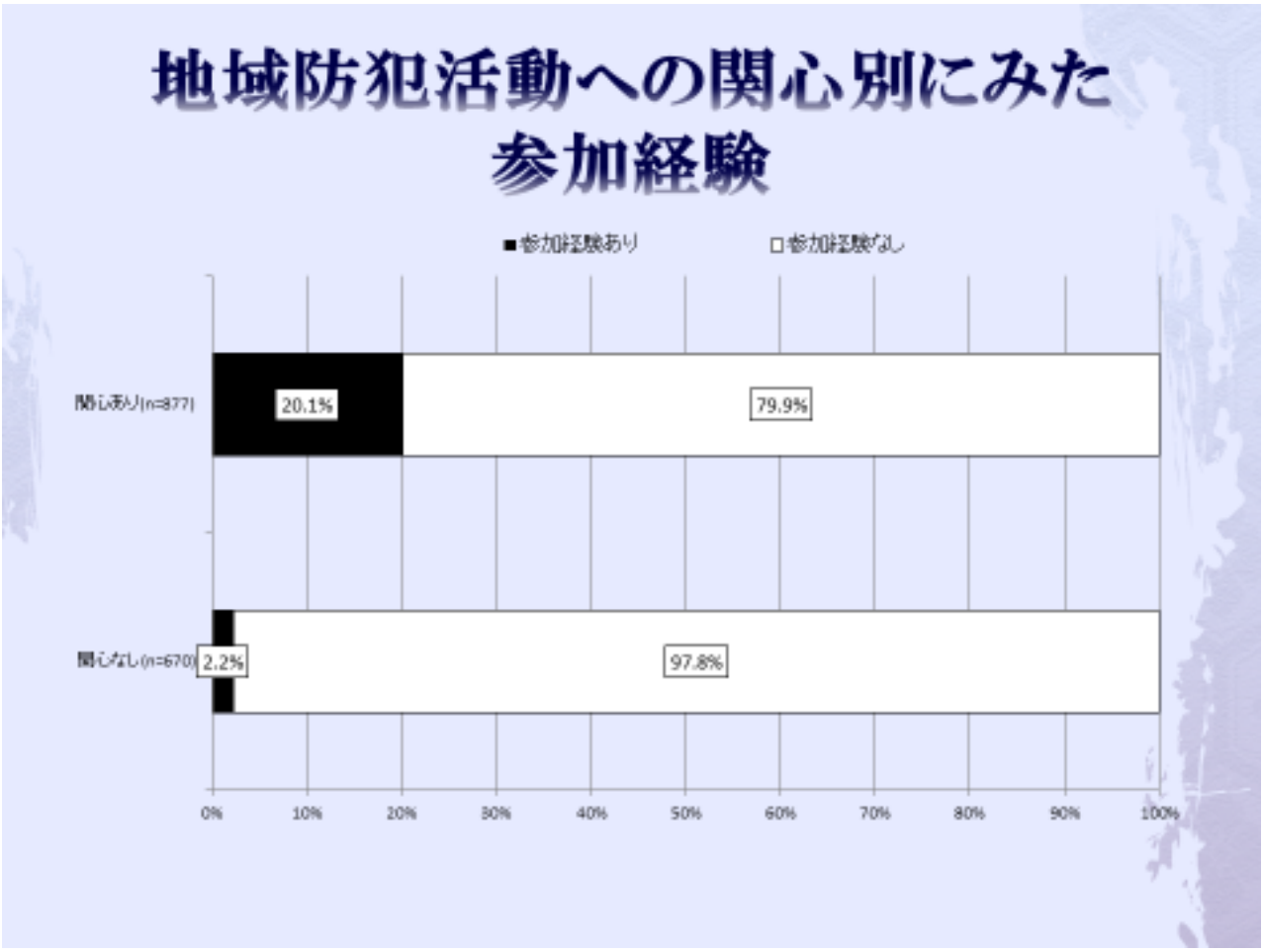
日工組社会安全研究財団の不安感調査２０１８より

３つ目の話を紹介したいと思います。３つ目の話として、地域防犯活動への人々の関心や参加状況がどうなっているかということを紹介したいと思います。これ、日工組社会安全研究財団という財団の調査でございます。2002年からの、もう20年近く継続的にやっている調査でございまして、継続的にやらないと、社会の変化が、日本の変化が捉えられませんので、わざと同じ質問で、同じ手法で、３年おきとか４年おきとか、お金があったらもう毎年やりたいんですけれども、継続的にやることによって、社会の変化を、あるいは、治安情勢の変化を捉えようとしている調査でございます。この調査で、2018年度調査ですから、去年の最新のデータからこういうことを紹介したいと思います。これは、日本社会全体の縮図となるように設計した調査でございます。人々が、過去３年間で自分が住んでいる地域の活動にどれくらい参加した経験があるのかということを尋ねたものです。そうすると、地域のお祭りは46.7％で、大体半分は参加経験あり。それから、清掃などのまちづくりの活動は、43.5％ですから４割ちょっとですね。防災訓練などの災害対策、26％ですから、４人に１人程度。地域でのスポーツ活動、子どもの育成、地域の芸術文化活動、で、下から２番目に地域での防犯活動、１割ほどです。地域での防災と比較すると、防犯活動に参加経験があるという経験率は防災の半分以下です。かなり低いです。相対的に見れば、防犯活動に参加した経験のある人というのは多くはないと言えます。ところが、関心ありますかと聞くと、こうなります。関心ありますかと聞くと、さっき、下から２番目だった地





域防犯が一気に、ぐんと上がるんです。今度は、防災が一番上に来ます。そして、清掃などのまちづくり、地域のお祭りが来て、そのすぐ下に来ます。関心があるかという質問に対しては52.8％ですから、半分です。参加経験だと１割程度ですが、関心があるという回答は半分になります。さらに、関心があるかどうかという点と、参加経験があるかどうかという点をクロスさせて、この２つの観点から分析すると、こうな



ります。つまり、上が関心があると答えた人ですね、で、下が関心がないと答えた人です。関心がなければ参加経験低くて当然なんですけれども、参加経験、関心があると答えた人でも、参加経験があるというのは、２割なんです。逆に言えば、こういうことです。活動への関心が、地域防犯活動に関心がある人のうち、８割に参加経験はないということです。ということは、地域防犯活動に参加する可能性がある人は、裾野が広いということです。まだまだ裾野が広いということが言えます。そうすると、こういうことを分析したくなります。じゃあ、「何が地域防犯活動への関心をもたらすのか」です。ここでは参加をもたらしているかどうかじゃなくて、関心を持つかどうかなんですね。参加だと、防犯以外のさまざまな地域のつながり、お祭りだったり、清掃だったり、防災だったり、地域コミュニティのさまざまなつながりで、結構、参加しているということが考えられます。どういう分析をしているかというと、性別と年齢、年齢別、小学生以下の子どもがいるかどうか、本人に犯罪被害の経験があるかどうか、自分自身が犯罪に対して不安に思っているかどうか、同居家族が犯罪の被害に遭わないかどうか、という不安感があるかどうかです。これ分析しますと、年齢別に見ると、40代と比べて高いのは50代、60代、そして一番高いのは70代です。70代、

地域防犯活動への関心を従属変数とした重回帰分析

	被害経験のみモデル	自身の犯罪不安のみモデル	同居家族の犯罪不安のみモデル	自身と同居家族の犯罪不安モデル
	β	β	β	β
性別（男=1、女=0）	-0.06 *	-0.05	-0.06 *	-0.06 *
30代ダミー	0.15 ***	0.14 ***	0.13 ***	0.13 ***
40代ダミー	0.12 **	0.12 **	0.10 *	0.10 *
50代ダミー	0.23 ***	0.22 ***	0.20 ***	0.20 ***
60代ダミー	0.29 ***	0.28 ***	0.28 ***	0.28 ***
70歳以上ダミー	0.27 ***	0.29 ***	0.30 ***	0.30 ***
小学生以下の子供	0.11 ***	0.11 ***	0.08 **	0.09 **
被害経験（ある=1）	0.03	0.02	0.02	0.01
自身の犯罪不安		0.14 ***		0.04
同居家族の犯罪不安			0.19 ***	0.16 ***
p値	p<0.001	p<0.001	p<0.001	p<0.001
N	1482	1470	1453	1450
調整済R^2	0.051	0.069	0.085	0.086

60代の関心が高い、40代が低いです。安定的な効果が見られるのは小学生以下の子ども、小さいお子さんいると、割と関心持っておられます。この分析で、一番右側のモデルが、これが、売りというか、一番決定的なんですけれども、本人が何らかの犯罪の被害に遭った経験があるかということは、地域の防犯への関心をもたらしません。本人の被害経験は、地域に対する関心をもたらさない。自分自身の不安感は、それを単独で見ると、それだけ取り出すと効果があるように見えるんですけれども、両方同時に、同居家族の犯罪不安と自分自身の犯罪不安を、両方を同時に投入すると、自分自身の犯罪不安の効果は消えます。消えて、何が残るかというと、家族に対する関心なんですよ。自分自身の家族に対する、同居家族に対する犯罪の不安感といったものが、地域に対する、地域の防犯活動に対する関心をもたらしている、という結果になります。まとめると、自分自身の被害経験は、地域防犯活動への関心には結びつかない。自身の犯罪不安は、それだけ見ると地域防犯活動への関心と結びつくんですが、総合的に分析すると、地域防犯活動への関心をもたらしているのは、自身のではなく、同居家族に関する不安感だというふうに、分析されます。すなわち、身近な人への不安、あるいは関心というものが、地域防犯への関心をもたらしている。不安、英語で言えばanxietyだったりfearであったりconcernだったりするんですけど、ある種の不安感は、関心を持っているということと、かなり近いですよね。他者に関心を持つということ、身近な人に関心を持つということ、地域に関心に持つということと、不安に思うということは、実は心理的にはかなり近いところにあります。ほんのちょっとの不安感は関心と結びつきます。例えば健康についても、似たようなことが言えるんじゃないでしょうかね。ほんのちょっと、自分の体に気を使う。自分はそんなに丈夫じゃないかもしれない。ほんのちょっとだけ病気に対する、病気になるんじゃないかという不安感を持つということが、むしろ、健康をもたらす、そういうことって、ほかの、健康のことでも観察できるというか、実感があるところではないでしょうか。ほんのちょっとの人々への、地域に対する不安感や関心が、より良い社会をもたらすんじゃないか、ということをお伝えしたいと思います。

これで私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

６．講　演（２）

テーマ：「自主防犯活動に対する意欲の向上」

講　師：株式会社　生活環境工房あくと

代表取締役　若林　直子　氏

ただいま、御紹介にあずかりました若林と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

私は生まれも、今住んでいるのも千葉県です。今まで、千葉県の皆様と一緒に活動をする機会がなかなかなかったので、今日はお呼びいただいて非常にうれしく思っています。今日は、皆様のほうがいい考えを持っているよというのがあるかもしれませんが、活動を続けていく、やる気を継続させるにはどうしたらいいかをテーマにお話させていただきたいと思います。

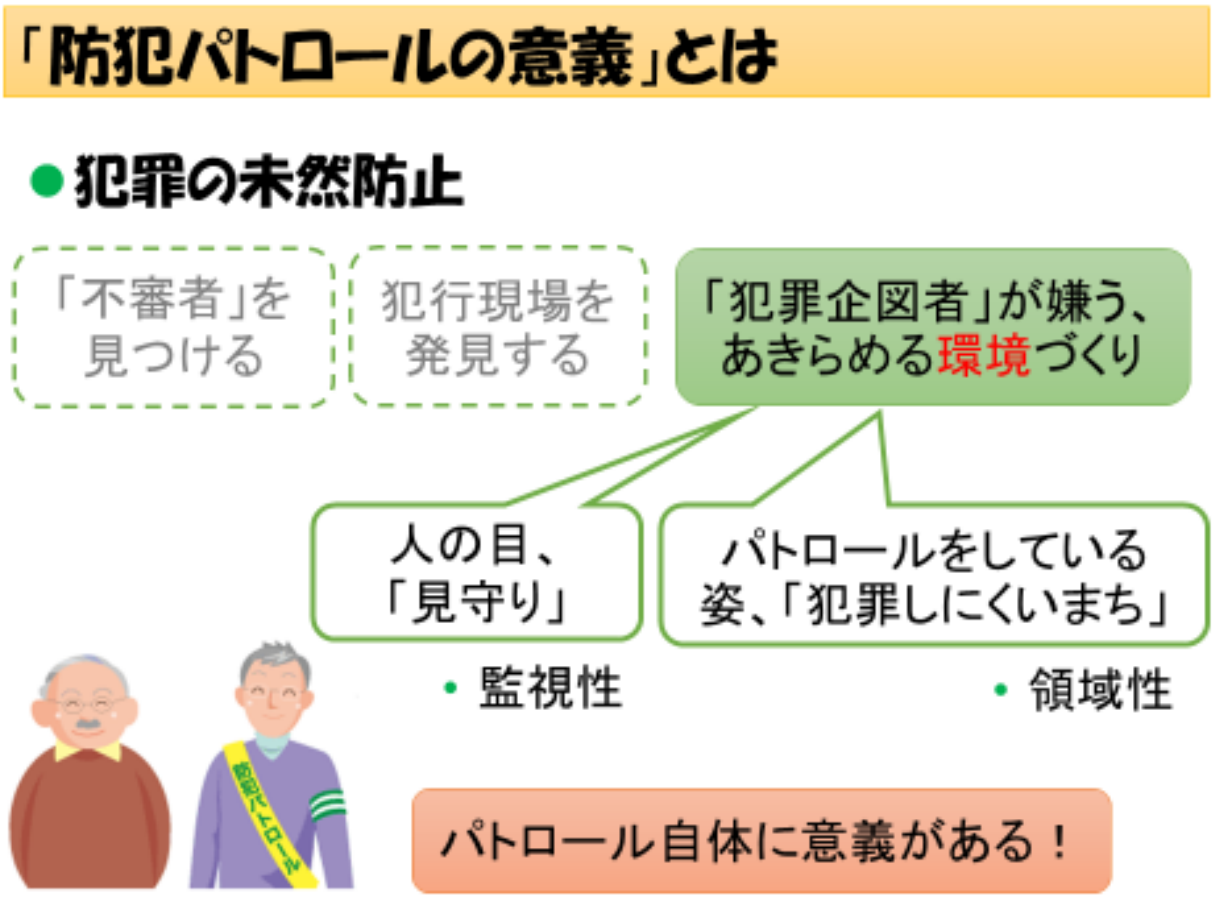
もう御紹介いただいたところで恐縮です、知名度がないので自己紹介をさせていただきます。私の軸足は、防災、特に都市の地震災害などで、災害が起こってしまったときにどうやって地域で助け合っていくかなどを、30年ぐらい研究したりコンサルティングをしたりしております。今回は台風で大変な地域がある中での講演ですので、ちょっと気がひけるんですけど、防災など、防犯ではない視点からもお話させていただきたいと思っています。

●防犯活動の課題

お話を始めたいと思います。今、皆様、自主防犯活動として、特に、防犯パトロールをなさっている方がほとんどと思います。最初に、防犯ボランティアの団体数がどんどん増えていっているというお話を御紹介いただきましたが、実際には、メンバーの方が高齢化して、なかなか新しい方が入って来なくて人材が少ない中で負担が集中しちゃうという事情もあり、団体として登録しているけど、なかなか活動できないという団体も多いというお話をいろいろなところからお聞きしています。また、最初に活動をスタートさせるときには、例えば、大きな事件があったとかで「今やらなきゃ」という強い思いがあっても、何年もそれを継続していくのはなかなか難しいとい

うのがあるかと思います。これは、防犯活動に限らず、防災など、いろんな活動で言えることですが、特に、防犯活動特有の難しい課題もあるのかなと思います。先ほど、山本先生がおっしゃっていたとおり、活動の意義、「自分たちが回ることで何件犯罪がとめられた」みたいな、そんな危ないことでは困りますけれども、目に見えるような成果があれば続きやすいですけれども、もともと犯罪多発地域ではない日本の中で「防犯活動をしたからといってどうなんだろう」という疑問、「やらなくても変わらないんじゃないか」とか「ずっと同じ活動でいいんだろうか」という疑問を何となく持ってしまうことはきっと防犯特有の課題かと。ここにいらっしゃる方がそう思ってらっしゃらなくても、地域の中にはそういう方もいらっしゃるのではないかなと思います。

●「防犯パトロール」の意義



釈迦に説法かと思いますが、ここでちょっと防犯パトロールの意義を見直してみたいと思います。山本先生にすごく印象的なエピソードを教えていただきましたけれども、「犯罪の未然防止」ですよね。不審者を見つけて捕まえるとか発見するというこ

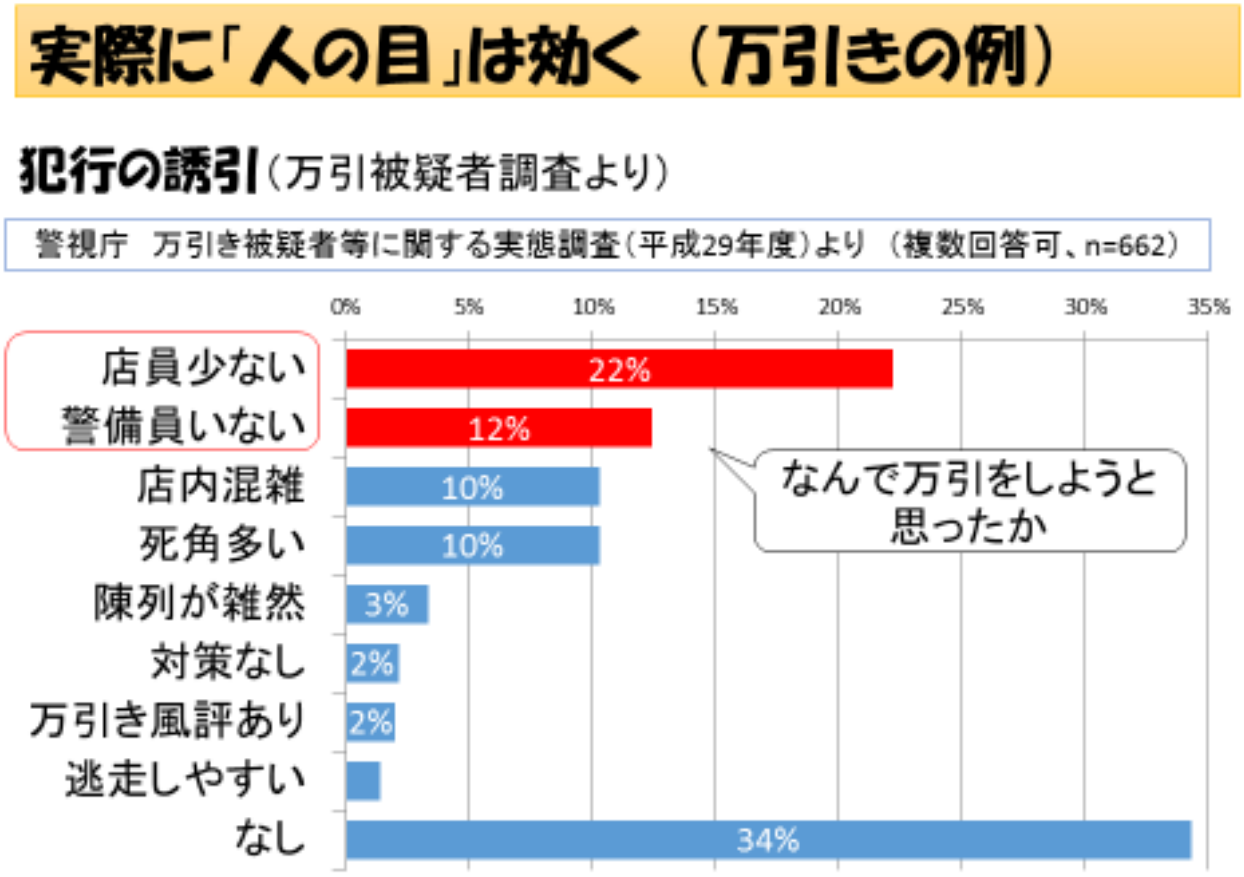
とよりも、犯罪をしようと思っている人が嫌う、犯罪を諦めるような環境づくりに、皆様の目、見守りですとか、皆さんがパトロールしている姿ですとかが寄与しているわけで、犯罪の件数の減少といった数字には表れないですけれども、パトロールしていること、皆様が活動されていること自体に既に意義がある、ということが大前提だと思います。

学問の世界でこういうことを言われているのでお借りしてきたんですが、日常生活で犯罪が起こるメカニズムとして、犯罪を考える悪い人、標的となっている人や環境があって、そこに「その他の人たち」がいる。この「その他の人たち」が有能な監視者、見守り者として、犯罪者、また標的になるような人や環境を見ていると犯罪が起こりにくく、見ていない、見えないという状態だと犯罪が起こりやすくなってしまう。犯罪は、犯罪者と標的との直接の接点部分で起きるのであって、見守る人が多ければ多いほどこの接点部分の面積を減らせる、つまり犯罪を起こりにくくすることができるという考え方です。これを、防犯活動に当てはめると、皆さまはこちら側（見守り者）で、防犯パトロール活動は「見守っている」というメッセージを強く発していますよね。もちろん100％ではないけれども、人の目がある、防犯パトロールをなさっている皆さんがいるということ自体が、地域の安全を水面下で支えていると本当に思います。

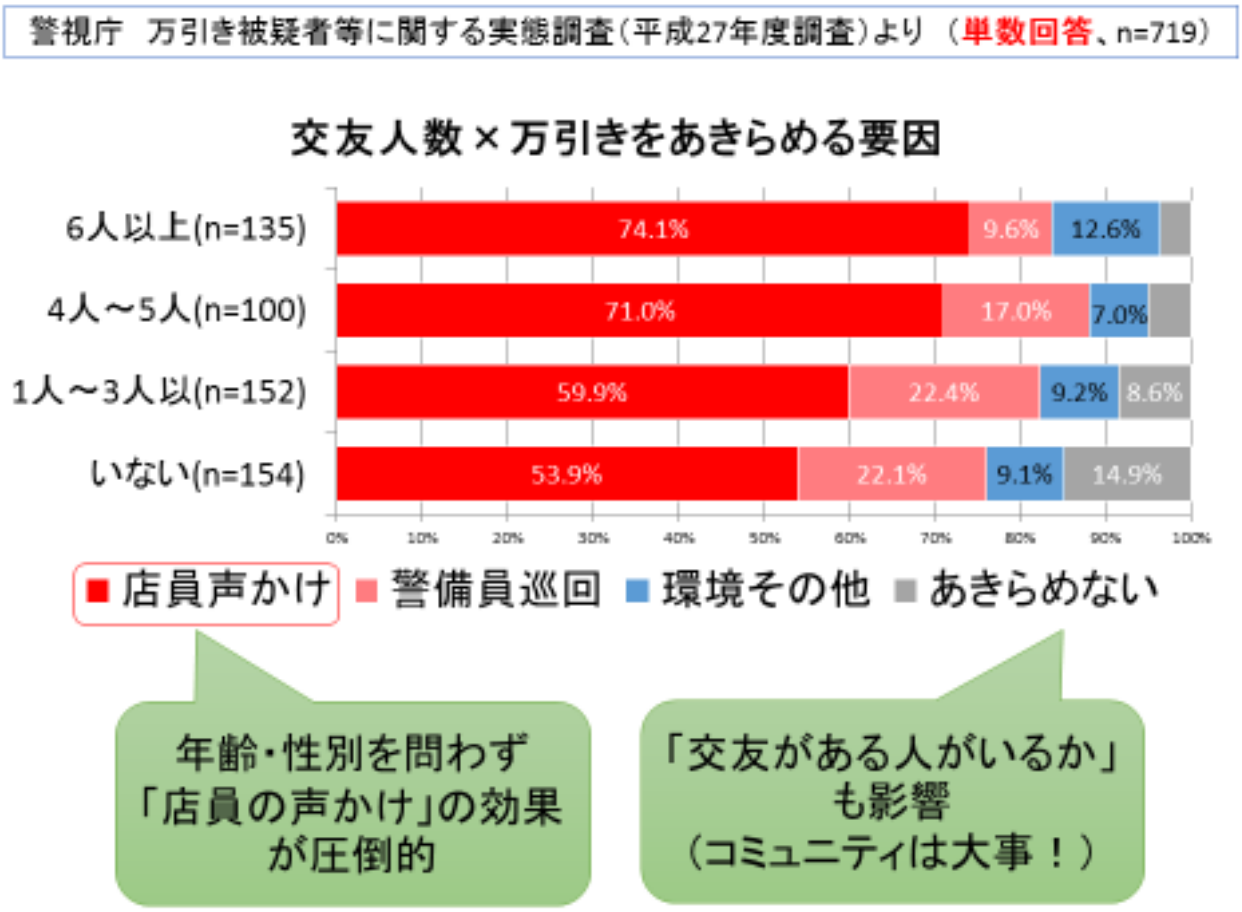
●「人の目」の効果（万引きの例）

実例として、東京都の警視庁の万引きの調査をお手伝いしている中から紹介させていただきます。これは、実際に万引きをして捕まった人の中から抽出して、警察の方が、何で万引きしようと思ったのか、この中から当てはまるものを答えなさい、といって聴取した調査の結果で、このスライドは、犯行の誘引、つまり「なんで万引きをしようと思ったか」の結果です。万引きは、何も考えないで突発的にやってしまうという場合が多く「特にないよ」が多いですけど、その人たちを除くと、店員さんが少ない、警備員がいない、つまり「誰も見ていない」がきっかけになったと答えている人が非常に多いです。また、犯行の抑制要因、つまり「何があれば万引きをあきらめたか」という項目を選んでもらったところ、ものすごく多くの方が、店員のあいさつ、店員や警備員の巡回、あと、知人の目と答えています。もちろん、中には、何があっても諦めないという人たちもいるわけですけども、こういうようなデータがございます。警視庁の万引き被疑者調査結果については何年かずっと分析をさせていただいて

いるんですが、いつも「人の目」というのは一番大きな効果として出てきます。タグとか、防犯カメラとかミラーとかも、もちろんあるわけなんですが、それらはあまり万引きをする人に重視されていないというか、もちろん、見ている人もいますけれども、それより「人の目」のほうが大きいというのがわかります。



もう一つ同じグラフは、違う年のデータです。先ほどは「どれでも該当するものを全部選んでください」という聞き方だったんですが、これは「何があったら万引きを諦めましたか、一個だけ選んでください」と聞いたときの結果です。赤いところ（グラフの一番左側）が店員の声掛け、ピンクのところ（グラフの左から２番目）が警備員の巡回なんですけれども、こんな感じで、人のことがすごく多くなっています。このグラフは「地域の中に交友関係がある人がいるか」という別の質問の結果ごとに分けていまして、交流している人が６人以上いるという人だと「人」がものすごく効く、全然いない人だと効く率が若干下がるという結果になっています。これは、人の目が犯罪をとめる力になるということと、地域のつながりがあるとその効果が増す、つまり地域コミュニティの大切さを端的に示しているんじゃないかなと思います。

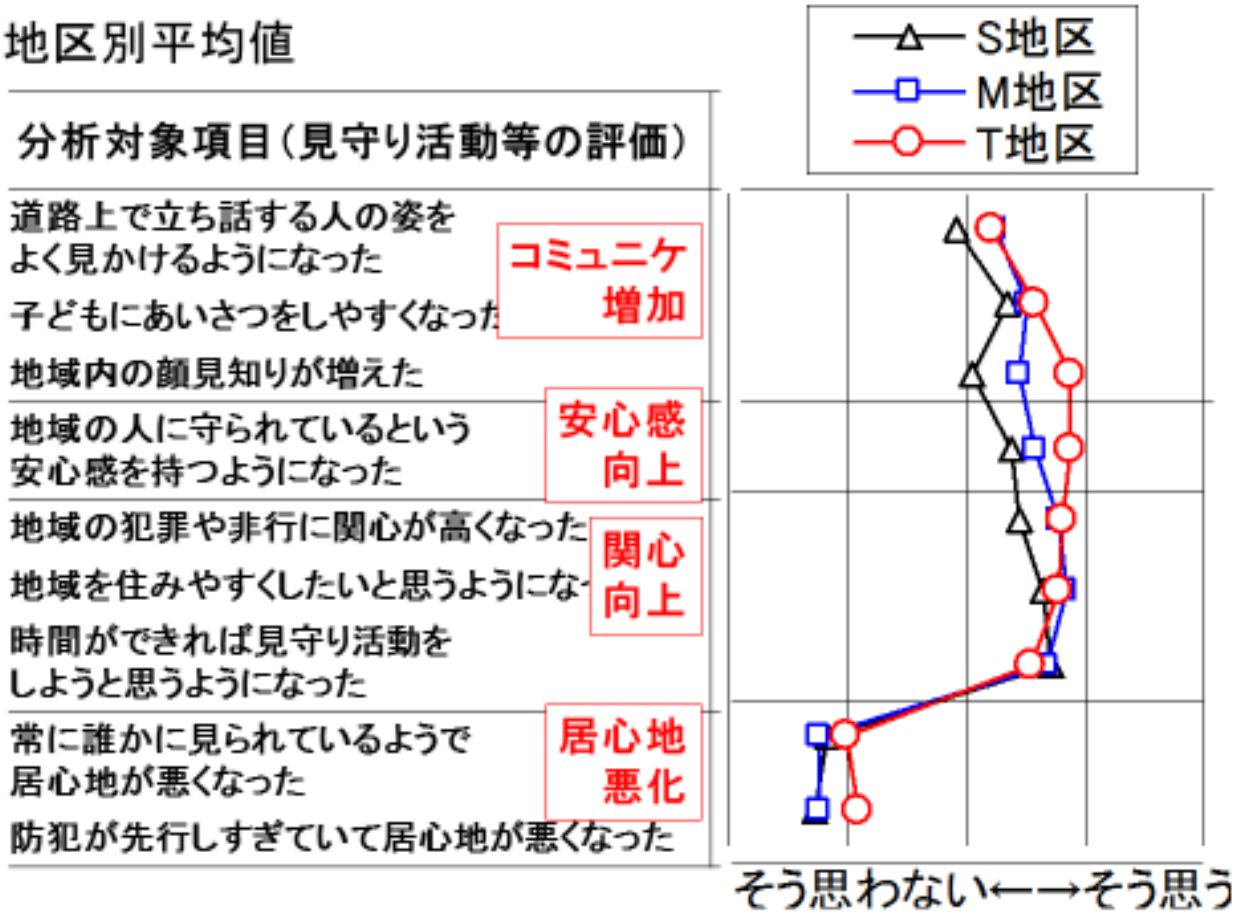


実験もしています。これは拓殖大学の先生と一緒にさせていただいたものなんですけれども、「声をかければ本当に万引き減るのか」実験で、「買い物コンシェルジュ」という名前をつけまして、その大学の学生さんに目立つ格好をしてもらって、万引き防止ではなくて、買い物をしている高齢者の方のお手伝いをするような活動をしました。この学生さんたちには、万引き防止のためではなく「買い物の補助をしてください」と言ってやってもらい、スーパーの方にも、店長さん以外は万引き関係で入っているということは知らせず、ただ、お店の手伝いの学生さんが来たと思ってもらってやった結果です。実験は、御高齢の方が多く買い物をし、高齢者による万引きが多いという実情のある大きなスーパーの一売り場で行ったのですが、活動の結果、商品が減っていく数（品減り数）がうんと少なくなり、それだけじゃなくて、店内の事故ですね、転んじゃったりという事例が減少したり、売り上げが増加したりというような効果が確認できました。「これは防犯活動です」とか言っていないんですけれども、すごく効果があったのです。

これに気をよくしてというわけではないんですが、別の年に、学生さんの動員では

なくて、都内のスーパー10店舗で、挨拶強化月間というのを決めて、ふだん挨拶しない警備員さんも、みんな、お客さんが通ったら挨拶しましょうというのをやってみたんですね。このときは、一つの売り場に限らず全店舗を対象に行ったので、先ほどの品減り数とか売り上げとか、そういった物理的な数字に変化はありませんでした。でも、10店舗の店長さんは、皆さん、商品ロスが減ったとか、売り場に活気が出たというのをすごくおっしゃっていました。売り場の方に対するアンケートとかヒアリングとかもやったんですが、その中で、皆さんがすごく言っていたのが「職場環境がよくなった」「ちょっと挨拶とか苦手だった人も声が出せるようになった」「店員同士のコミュニケーションが上がった」と。そんなことは意図していなかったんですけれども、すごく良い効果があったようで、これは防犯活動に通じるものだなというふうに思っています。

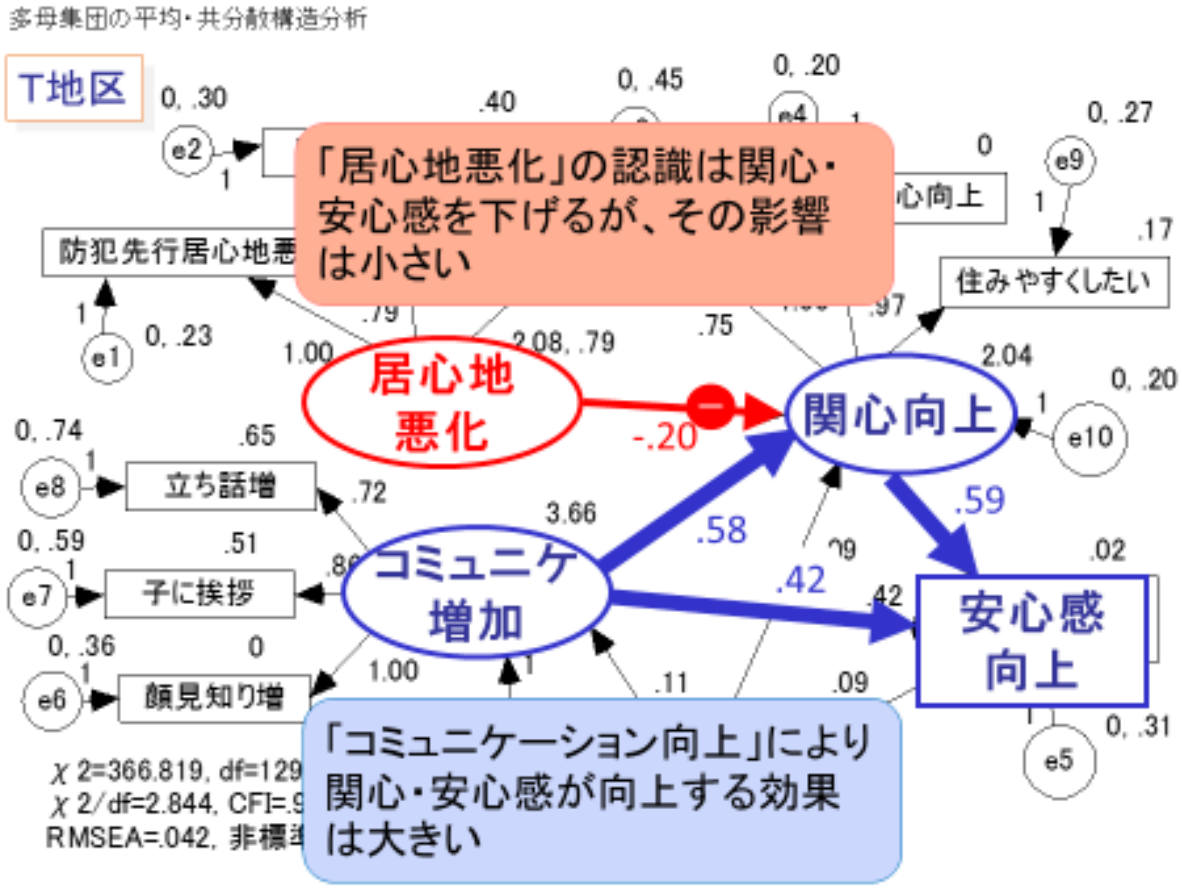
●防犯活動はコミュニケーション増加につながる



防犯活動でアンケート調査をしたお話もさせていただきます。ずいぶん前の事例ですけれども、いろいろな大学の先生と一緒に、奈良市の防犯活動をなさっているＰＴ

Ａの方々、住民の方に対してアンケートをやった結果を分析したものです。実際に防犯活動をすると、この地域の方のコミュニケーションが増加して、それによって地域や防犯への意識が高まったり、安心感が高まったりするというような効果を検討しています。この地域は小学校１年生の女の子が帰宅途中にさらわれて殺されてしまったという、痛ましい事件があった地域です。ですので、当初はものすごく熱心に防犯活動をなさっていたんですね。でも、だんだん「いつまでやればいいのか」という疑問が地域にでてきて、それで調査をさせていただいたというところです。

ここで言う「コミュニケーション増加」というのは、例えば、路上で立ち話をする人の姿をよく見かけるようになったとか、子どもが挨拶をしやすくなったとか、顔見知りが増えたとか、そう思うという人が増えている、多いというような調査項目です。「関心」は、地域の犯罪や非行の関心が高くなったとか、地域を住みよくしたいと思ったなどです。防犯活動をすることによって、常に誰かに見られているようで、居心地が悪くなったという項目もあります。（グラフは）右に行けば行くほど、そう思うという人が多い、左に行くと、そう思わないという人が多いということを表しています。これを、それぞれの項目間に、どんな関連があるのかなという計算をしました。



その結果、「コミュニケーション」が増えると「関心」が増え、「安心感」が増える。また、「コミュニケーション」の向上は「関心」「安心」の向上と関連が非常に大きいと分かりました。「居心地が悪い」という認識が関心を下げるということもありましたが、数値が小さくて、大きな影響はありませんでした。そのため、この地域には「コミュニケーションの向上は関心・安心感の向上を促す」ということだけ考えましょうとお伝えし、この地域の防犯活動の目標を、「コミュニケーションを増やそう」というふうにシフトしましょうというお話をしました。そうすると、目標の達成具合が目に見えるので、やりやすくなると思います。

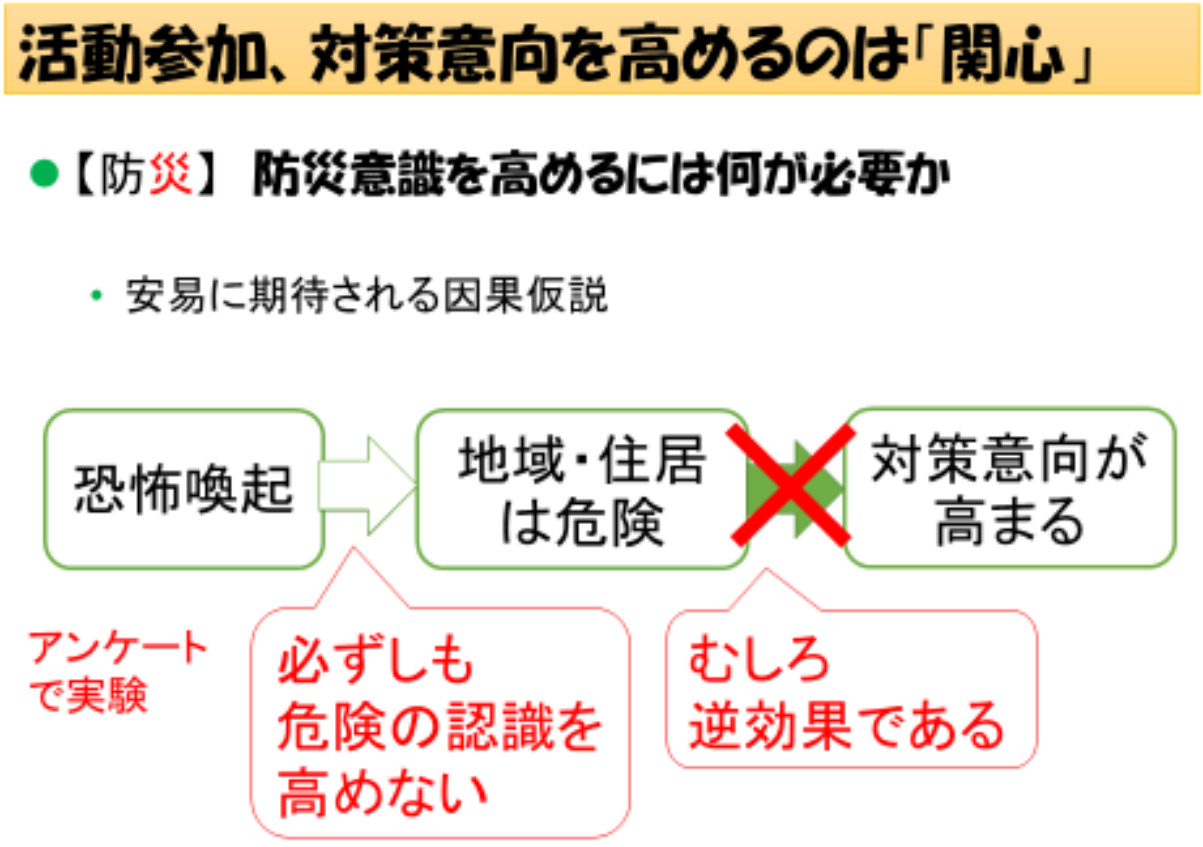
●「コミュニケーション」は安全安心の第一歩

私がご説明をするまでもなく、コミュニケーションは、安全・安心の第一歩になるかと思います。ふだんの防犯活動はもちろん、防災など、災害時の助け合いとか治安対策にもつながって、とても大事なところですし、ふだんのコミュニケーションは、地域の情報共有にもつながるわけで、今問題になっている特殊詐欺対策などの情報も広がっていくということになろうかと思います。防犯というと、とにかく「地域を安全に監視する」というイメージですが、先ほどの例のように地域のコミュニケーションを目標にしてしまえば、活動の幅も自然と広がるかなというのは、私がすごく思っているところです。

実際に防災でこれをやっている事例が結構あります。これは東京都の大きなタワーマンションで、お住まいの方々で「防災コミュニティ委員会」というのを作って活動したときの事例です。何かあったときに、みんなで助け合えるように活動を検討しようという目的だけじゃなくて、いざというときにみんなで助け会えるような日常のコミュニティづくりも、この委員会でやっていきましょう、としました。こんなことを言うと、単なる自治会活動じゃないかというふうに思われますが、ただ、こういうふうに明確にすることで、「ただのお祭りにはそんなに関心がない」「やっていたらちょっと行ってもいいけどね」という人も、「災害時のためになるんだったら積極的に参加しよう」となって、地域という場に出てきやすいという効果があります。この委員会では、ハロウィンのときに子どもがみんな仮装して、タワーマンション内のいろんなおうちやお店を回るということを、防災活動の一環として実施なさっていましたが、そういう活動もとてもよいと思います。

●活動参加、対策意識を高めるのは「関心」

今、防災の話をお出ししましたので、防災意識を高めるためには何が必要かという研究の話も少しさせていただきたいと思います。「危険だ、危険だ」、例えば「大地震は怖い」「地域が危険」とみんなが思えば対策意向が高まる。これは普通に考えられるルートだと思うんですが、実際にアンケートなどをしてみると、「危険だ、危険だ」と思っちゃうと、対策意向が弱まっちゃうという意外な結果になります。先ほどのお話とちょっと相反する部分もあるんですが、アンケートの結果を分析すると、根拠のない恐怖感、根拠のない不安感が高まってしまい過ぎると、「自分で何とかしよう」と思うより、「誰か何とかして」というふうに思ってしまって、地域への関心が下がっちゃうのです。「怖い、怖い」じゃなくて、地域に対する愛着が高まれば、おのずと関心が高まります。そして、地域への関心が高い人は、もともと地域とかかわっていて、防災以外のいろんな地域活動、近所づきあい、そしてさまざまな防災対策も自然としています。ただただ「怖い、怖い」と思うよりも、地域とかかわりを持って、関心を持っていたほうが行動をするし、地域活動も長続きするよという分析結果です。これは防災の事例ですけれども、地域の防犯に置き換えても、違和感がないの



かなというふうに思っております。

防災だけではなくて、防犯を含む、いろんな分野でも、地域に対してどう思っていると対策をやったり、活動に参加したりするかという研究もしています。その結果、不満や不安が高いか低いかはあまり関係なくて、地域に対して魅力を感じているか、地域に対して関心があるかという、この一点だけがものすごく影響しますよ、というようなことがわかりました。またほかの分析では「プラス思考」が活動参加を促し、不安をあおるのはＮＧということがわかりました。地域を正しく認識していて、「こういう危険がある」というふうに思うのは、まさに正しいことなんですが、「何があるかわからない、不安だ」と思ってしまうのはあまりよくない。認知的不協和理論と言うのですが、自分はだめだだめだと思い詰めてしまうと、だめな自分を嫌いになっちゃって、自分に対するケアを怠っちゃうということと同じようなこと、つまり、地域の安心安全のための活動を怠ってしまうという傾向があるようです。地域への関心にはコミュニケーションが効くということかなと思っております。

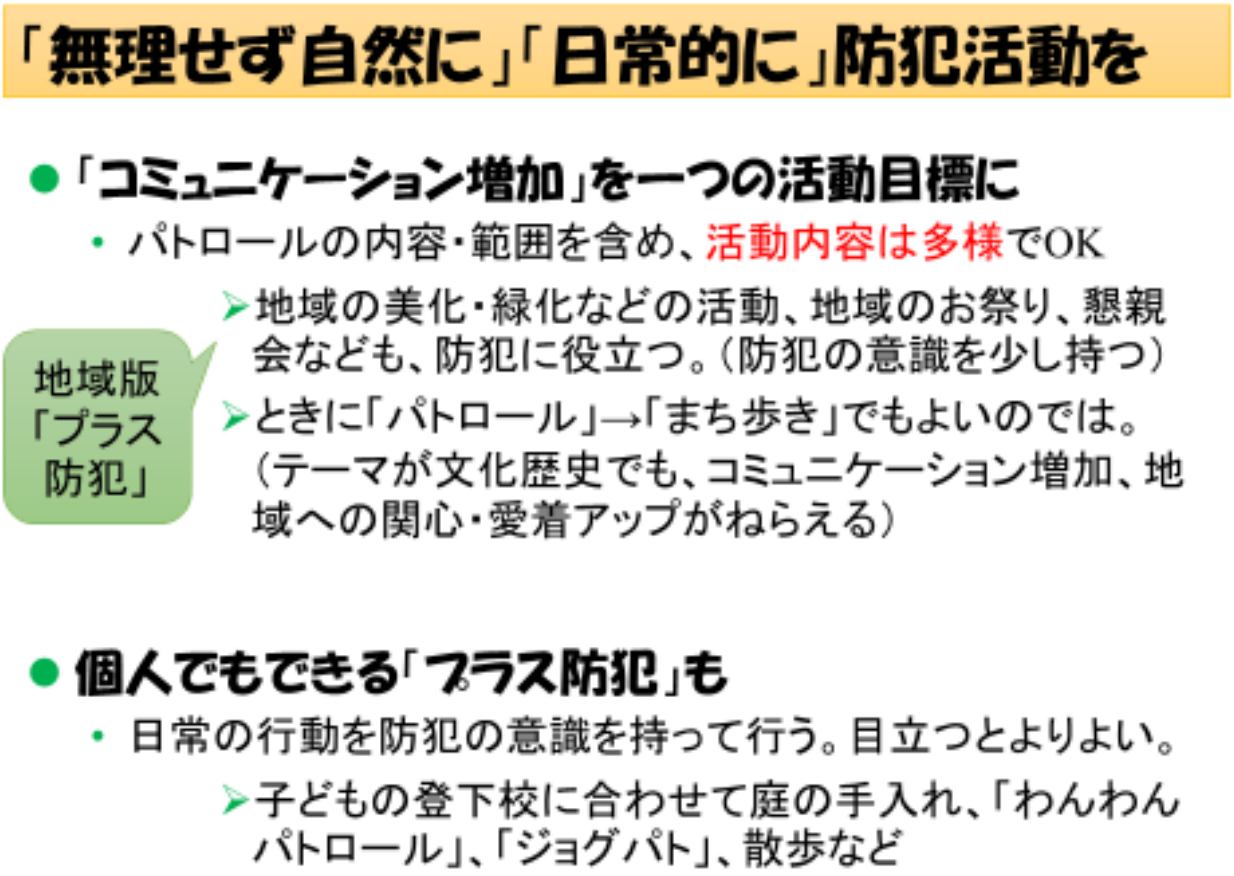
コミュニケーションについても、ねちねちと調査研究をしております。20年ぐらい、同じような対象の方々、地域にお住まいの方々に、近所づきあいをどのぐらいしていますか、というのを聞いて、「よくしている」「会えば話をする程度」とかを答えてもらい、平均点をプロットしました。その結果、20年前はかなりコミュニケーションをとっていたんだけれども、どっと下がってきているというのが、よく確認できています。地域コミュニティは防犯上も安全上もとっても大事だけれど、だからといって、昔ながらの近所づきあいをするのは今はなかなか難しいねというのが、アンケート結果にも出ているということかと。同じアンケートで、地域に対してどう思っているか、愛着があるか、関心があるか、安心できると思うか、安全だと思うか、ということも聞いています。年を追うごとに、地域への愛着は下がってきていて、「安心だ」という意識もちょっと下がってきています。でも「地域の治安がいい」「安全だ」というのは上がってきています。「安心」が下がって、「安全」が上がっていますが、これは「目に見えないものへの不安感があって安心できない」という今の現状を表していると思います。

●「無理せず自然に」「日常的に」防犯活動を

脱線してしまったので、自主防犯活動のやる気の話に戻します。無理せず自然に、日常的に防犯活動をする。皆さんもそのように心がけていらっしゃると思うんですが、

本当にそれを、大手を振って、それが大事なことなんだと心から思って続けていただくのが一番かなというふうに考えております。コミュニケーションの増加、これが、本当に地域の安全にとって大事なところですので、「地域の安全はわからないけど、コミュニケーションはするようになったよね」ということを消極的にとらえるのではなく、「コミュニケーションが増加したんだからすばらしい成果だ」と思って、むしろそれを活動目標にしてやっていただくのがとてもいいんじゃないかと。パトロールの内容とか班、いろいろ、大変だと思います。そのあたりはもう多様でＯＫで、やることに意義がある。

　また、地域に手を入れるという活動は全て、地域の防犯活動にもつながります。特に、防犯との親和性が高いなと思っているのは、地域の美化とか緑化です。清掃などの活動をずっと、防犯活動とは別にされていらっしゃる方も中にたくさんいらっしゃると思いますが、清掃活動自体も防犯に役立っていると思いますし、そういう意識で取り組まれるのはとてもいいです。パトロールも「街歩き」ぐらいの気分で参加してもらえると、とてもいいのかなというふうに思います。「プラス防犯」という言葉が



あります。これは、個人で、日常の行動を、防犯の意識を持って行うというものです。わんわんパトロールとかジョグパトとかいろいろありますが、それの地域版があってもいいかな。そのくらいの気分で進めていただくのが活動を継続しやすいわけで、本当に地域のためになるんじゃないかなというふうに思います。

これは私が長くおつきあいしている横浜市の鶴見区の市民の皆さんが、国道１号線沿いの緑化活動や清掃活動をしている写真です。ですが、ぱっと見たら、防犯パトロールの写真にも見えますよね。そういうことで、防犯活動と同じ効果があると思いますし、あと、緑って定期的に手を入れていかないといけないものなので、そういう意味でも、活動継続がしやすい活動ですし、趣味にもなったりもします。既にそういう活動をなさっている方もいると思うんですが、こうした活動も防犯活動の一つと考えてもいいというふうに思っています。

●動機づけに不可欠なのは「満足感」

行動の動機づけに絶対不可欠なのは、「満足感」と言われています。実際、不安だったり不満があったりして何か行動を起こすことはもちろんあるんですけれども、それが継続できるかというと、なかなかできない。なぜかというと、不安や不満が解消されても、満足感が得られないからです。不満と満足は一つの軸じゃなくて別の軸だと考えられるのです。こういった点で、不安からスタートしがちな防犯活動は、やる気の維持、継続が難しいところなのかなというふうに思います。ですので、誰としゃべったとか、知り合いが増えたとか、新しい人がちょっと参加したなど、もうちょっと、具体的、日常的な目標を掲げて続けていただくというのがとてもいいのかなと思います。これは既にやっている方、すごく多いと思うんですが、防犯パトロールで何歩歩いたかとか、今、簡単に記録できますので、ちゃんと記録とっている方とかもいらっしゃると思います。これは個人の健康増進にとても大事なところだと思いますし、あと、歩いている間に、地域のおもしろいところとか変化とか、防犯じゃなくても「あの崖、危なそうだな」とか、そういう危険箇所を知ったとか、知り合いが増えたとか、自分の子どもを参加させて、子どもが誰かと話してくれてちょっといい関係になったとか、ためになる話を聞いたとか、そういう具体的、個人的で目に見える達成感を活動の中で積み重ねていく。活動目標自体も具体的、日常的なものに分解していただければ、目標の達成具合が目に見えて励みにもなる。それが結果的には、防犯活動の自然な継続になり、安心安全な地域づくりにつながると思います。

最後になります。よい地域は防犯上も強い、ということが言えると思います。自主防犯活動は、総合的なよい地域とか、生活づくりとかのきっかけにもなると思います。続けることが大事ですので、日常の中で無理なく行える、続けられる範囲で、プラス思考で取り組んでいただくというのが、とても地域のためになると思っております。

どうも、ありがとうございました。以上となります。

７．質疑応答

皆様、こんにちは。千葉県くらし安全推進課の川島と申します。事前にいただいた御質問に関しまして、２点ほど、御説明いたします。

●県内の防犯カメラの設置台数

１点目は、県内に防犯カメラは、どれくらい設置されているかという御質問です。県内に設置されている防犯カメラの中には、各種助成制度を活用して設置されているものですとか、補助制度の支援を特には受けずに、団体等の自己資金で設置されたものなど、いろいろありますので、社会全体にある防犯カメラを何台かと把握するのはなかなか難しい点がありまして、県として、正確に設置件数を把握しているということになりますと、県の補助制度を活用して設置されたものということになりますので、この件数についてお答えいたします。

県の補助制度は、市町村が実施する防犯カメラの設置事業に対して補助をするもので、この市町村が実施する防犯カメラの設置事業は、文字どおり市町村が設置するという場合と、あと、設置自体は自治会などの地域的な共同活動を行う団体で、その設置費用の一部を市町村が補助するというような場合に、その市町村の経費を県が補助するというものでございます。県の補助制度は、平成23年度から開始しておりまして、平成30年度までの８年間で45市町村、1,413台が設置されているところです。

●自主防犯活動の促進に向けた県の取組

２点目としまして、防犯パトロール参加者の高齢化減少傾向に対して、どのように対応すればよいかというような御質問をいただきました。この点につきましては、本日の御講演の中で、大変参考になるヒントを御教示いただいたと存じますので、私からは、自主防犯活動の促進に当たって、又は、強化のために県が行っている取組について、御説明いたします。

１つ目は、自主防犯活動の拠点となる施設として、警察官ＯＢなどの勤務員が常駐する形で、防犯ボックスの設置を進めております。市町村が防犯ボックスを設置するという場合には、ボックスの設置費用と勤務員の人件費の一部を、県から支援しております。防犯ボックスは、現在、13市町にございまして、県設置の防犯ボックスが、

千葉市、柏市、船橋市の３市、そのほかに、市町村が設置した防犯ボックスが10市町、具体的な市町名でいきますと、開設した順からですと、八街市、市原市、酒々井町、松戸市、君津市、茂原市、四街道市、東金市、栄町、市川市にございます。防犯ボックスの効果検証を昨年度に行いましたところ、地域防犯団体との合同パトロールを通じた防犯ボックス勤務員の防犯指導によりまして、地域防犯活動の質の向上に寄与したというようなことと、高齢化などにより減少傾向にある地域防犯活動を下支えしているというような効果が認められるというような結果が出ているところでございます。

また、そのほかに、県では、防犯ベスト、のぼり旗など、自主防犯団体の皆さんがパトロール活動に使用する装備品などの整備や、自主防犯団体などが使用される青パト車両へのドライブレコーダーの整備を市町村が行う場合に、その費用の補助ということも行っております。

そのほかに、先ほどの若林先生の御講演の中でも御提案がありましたけれども、自主防犯団体等の、組織に所属していない個人の方の防犯意識を高める、持ってもらう、地域防犯活動に参加してもらう方策の一つとして、「プラス防犯」を近隣都県などとともに推進しております。「ながら防犯」というような言葉で聞かれたことがある方もいらっしゃるかと思いますが、同様の意味でございまして、ふだんの通勤、買い物、犬の散歩などの際にプラスして、不審な人物や車両がないかなどを注意して見てみようということを提案するものでございます。今年度はこの活動を推進するキャンペーンを、近隣都県とともに、一斉に実施したところです。

最後に、この場を借りての県からのお願いでございます。県内ではこのたびの災害に乗じた悪質商法や、損壊した建物などを狙った盗難事件等が発生しております。外出時の戸締まりの徹底、御近所同士での声のかけ合いなど、地域ぐるみでの注意をお願いいたします。また、不審者を見かけた場合には、警察への通報をお願いいたします。

令和元年度

地域防犯力の向上に関する交流大会報告書

編集：千葉県環境生活部くらし安全推進課

TEL 043-223-2299　FAX 043-221-2969